

いままでの未整理地帯であるが、それでも戦後、技術改善が効果をあげ、いまでは平均五百四十<sup>キ</sup>に達し、全地区に保護苗代が普及している。

排水の悪いことは用水路の高さにもあるが、このため土壌条件も、土質が固く土壌の酸酵が悪い。秋落ち型の水田である。

このため土づくりについては、たい肥増施によって地力をため、漏水田の対策としては育苗と施肥のやり方を改善して反収の向上をねらったという。

渡辺さんの「日本一」は偶然生まれたものでない。昭和二十八年から町の4Hクラブの会長、農協青年部副部長、農協部落副会長、近代化ゼミ稲作コース会員、健康な稲づくり運動推進委員と、これと稲作ならだれにも負けない意欲を燃やしてきた。かつて4Hクラブの会合でそ

れぞれの趣味を発表したとき「わたしの趣味は米づくりだ」と、はつきりいいきった稲作に対する執念に、湯沢普及所の長坂技師も舌を巻いている。

渡辺さんの稲作りの学習活動は観察調査にはじまる。自分のほ場を一巡してからよそのほ場に足をのぼす。会員の水田に出向いて助言する。草丈、葉数、分けつ、水温、地温、気象が克めに記録され、一年で大学ノート三冊は真黒になるという。先進地を視察してもかならず日帰り。日没前には田んぼに姿を現わす。

例年の受賞にも増して関係者をよろこばせていることの一つに入賞品種があげられている。それは昭和三十七年から本県の奨励品種の筆頭にあげられている「ヨネシロ」が、はじめて日本一に選ばれたことである。

それだけに苗の栽培にはとくに慎重で

丈の短い、根の多い、活着のいい健苗。育成に精根をかたむけた。

苗とり作業の能率をあげるためには、苗床に砂と完熟したたい肥を入れることも忘れない。技術管理にはあくまで理論的で自分で確かめてから納得する。

出品田には自信をもって「ヨネシロ」を植付けたという。低温に強く分けつもいいが、出穂後、茎が軟かくなるのでないか。紋枯病にはあまり強くないが収量があがった。茎数確保には苦労があつたがことしはこの反省を生かすのが楽しみだともいう。

「茎数を早くとったこと、ねん実歩合いを高めたこと。それに五月末に田植えをして十月十一日の刈りとりまでたっぷりみのらせたことでしょう。ひとくちにいうと、早生品種のおく手栽培が成功のカギでした」。

渡辺さんの田んぼは、ここ二、三年二〇〇程度の増収がみられている。昨年の参加田も、蓄積された成果が「日本一」に結びついたものである。

特殊な技術でない安定したものにした。——というのが、若い日本一受賞者の念願でもあった。

米作りにふさわしい環境に恵まれたこともたしかであろう。渡辺さんの田んぼの近くには昭和二十八年に「米作り日本一」となった石川定雄さ

ん、五石どりグループとして活躍中の水口農研などが技術をきそい合っていたことは刺激となり励みとなった。この頃から「日本一」をひそかに念願した。渡辺さんの手元には早くも四十二年稲作の設計書ができあがっていた。それによれば、

田植を五月三十一日と見てそれに見合う苗作りを行う。田植後十日目から分けつさせる。六月末には有効茎数をとって一株二十本平均とする。七月一日頃葉の色を見ながら十五日頃追肥をする。七月二十日を分けつ期とみて、末日にチッソの濃度をさげる。八月七日頃を出穂期とみて十三日頃追肥をする。栽培密度は坪当たり七十二株、千四百本を確保する。この頃紋枯病のつてい的な防除を行なう。

科学的な根拠に立たないことは納得できない近代農民のあくことない探究心と粘り強さ。渡辺さんは平凡なことをやりぬいた。非凡な農民であった。



「趣味は米づくり、という渡辺重博さん」



代表清酒

高清水

秋田酒類製造株式会社